キャラクター名
辰守　流斗-タツモリ　リュウト-

プレイヤー名

シンドローム	キュマイラ キュマイラ	ワークス	レネゲイドビーイングA	カヴァー	高校生
オプショナル		年齢	16歳（高2	性別	男
覚醒	生誕	衝動	妄想	初期侵食率	36 %
出自	待ち望まれた子	経験	裏切り	邂逅	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	6	1	0		2	9
感覚	0	0	0		1	1
精神	0	0	0		1	1
社会	2	0	0			2

HP	39
行動値	3
(非装備時)	3
戦闘移動	8
全力移動	16

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	8.		射撃	1		ＲＣ			交渉		
回避	1		知覚			意志	2		調達		
運転：			芸術：			知識：			情報：UGN	5	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
虚龍ノ激槍-ブレイクホロウ-	白兵	9r+8	1			砕け、惑い、死出の道
破壊の爪		0	1	28		～99
破壊の爪+オリジン		0	1	38		
破壊の爪		0	1	30		100～

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品	
コネ：噂好きの友人	
コネ：警察官	
コネ：情報屋	
狗山　邂	
ホープオブオープ	

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
実験体	P	N		
稲葉　卯月	P　庇護	N　隔意		
菅野　幸樹	P　同情	N　隔意		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P:　4	残り財産P：

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：コスト分のHPで復活								
ヒューマンズネイバー	1		常時					
効果：衝動判定ダイス+LV								
フルパワーアタック	5	4	セット				80↑	
効果：行動値0に　攻撃力+Lv*5								
復讐の刃	2	6	オート	至近	単体	白兵		
効果：リアクション放棄でC-LVの攻撃。リアクション不可								
Cキュマイラ	2	2	メジャ					
効果：								
鬼の一撃	7	2	メジャ			白兵		
効果：対象がガード時　ダメージ+LV*5								
獣の力	1	2	メジャ			白兵		
効果：攻撃力+Lv*2								
破壊の爪	12	3	マイナ					
効果：攻Ｌｖ*2+8　G1								
オリジン：アニマル	5	3	マイナ					
効果：シーン間白兵攻撃+Lv*2								
ハンティングスタイル	1	1	マイナ					
効果：戦闘移動　シーンLV回								
一角鬼	1	3	マイナ					
効果：射程5M G2								
ターゲットロック	5	3	セット					
効果：3*LV								
鋭敏感覚	★							
効果：鋭い感覚								
効果：								

EA/LM/
画像
Picrewの「DGCメーカー」でつくったよ！ https://picrew.me/share?cd=SawfYIDV5G #Picrew #DGCメーカー

自分の身長が少しコンプレックス。力も強いため体育はあまり好きではない。
いつも笑顔で普通を満喫している。その普通を謳歌するために、彼はなんでもするだろう。
組織に所属するのは過去の出来事からはばかられたが、それでも恩を返すためイリーガルとして協力している。

元FHチルドレン
両親はFHエージェントで、自らの子を次世代のエージェントとして組織に貢献させるべく、生まれてすぐに研究施設に預ける。
時折その成長具合を確認しに足を運ぶため、彼は二人が自分の両親であるということはわかっていた。
だがそこに家族の愛情や絆など感じられず、ただただこの世界に自分を産み落とした、云わば元凶であると思っている。
研究施設では数多くの実験台にされた。骨格・筋力の増幅、感覚の鈍化、高負荷環境での生命維持、戦闘限界の超過、etc...
数々の実験を超え待っていたのは、捉えられたレネゲイドビーイング達との殺し合いだった。
食料は無く、水もなく、ただ目の前に時に友好的な、時に好戦的なレネゲイドビーイングが送り込まれてくる。
生きるためだった。それだけだった。殺したもの喰らったもの啜ったのも、すべて生きるためだった。
気がつけば彼はもうひとではなく、薄汚れた出来損ないの混ぜこぜの空虚な怪物だった。
初めて外に出た、初任務だった。だが
データを取り終わったのか、あまりにも彼が可愛そうになったのか、指令を受け向かった先には敵はなくただ同じ施設の人々だった。
彼の使いみちはエージェントの育成のための、レベルをあげるためだけの怪物という扱いだった。
ここで絶える命だったはずだ、消えてなくなるべきだったはずだ。
世界の均衡を保つ者たちはその命が消えるのを許さなかった。その歪で小さな光はすくい上げられたのだった。